C-5

主観化の観点から always と共起した進行形についての考察

森　創摩

【要旨】

進行形は always, continually, constantly, forever, perpetually, everlastingly などの副詞と共に使用されると、話し手の非難・不快やいらだちを含意する傾向がある（ここでの「含意」は、先行研究によっては「感情的付帯的響き」(emotive overtone) あるいは「感情的色彩」(emotional coloring) と呼ばれることがある)。本研究の目的は、そのような進行形は通時的には主観化を起こしていると主張し、その論証を行うことである。また本研究では、always などの副詞と共に使用されている進行形は、Traugott and Trousdale (2013) の意味での constructionalization を受けている（あるいは、受けつつある）と指摘する。

1. はじめに

● 進行形は always, continually, constantly, forever, perpetually などの副詞と使用されると、話し手の非難・不快やいらだちを伴うとされている。

(1)　He's **always asking** silly questions.　(安藤 2005: 117)

◆ 本研究の目的

always などの副詞と共に使用された進行形は通時的には主観化 (subjectification) されていると主張し、その論証を行う。また、このタイプの進行形は constructionalization を受けている（あるいは、受けつつある）と指摘する。

◆ 本研究の主張

always などの副詞と共に使用された進行形は主観化を受けている。

2. 先行研究

● Huddleston and Pullum (2002)

Huddleston and Pullum (2002) は、進行形は always, continually, constantly, everlastingly, forever, perpetually などの副詞と用いられると、「感情的付帯的響き」('emotive overtone') ― たいてい「不承認」(disapproval) ― を伴う傾向があると述べて、以下の例を挙げている (cf. Declerck (1991), Žegarac (1993))。

(2)　He's **always losing** his temper.

(3)　They're **always meeting** at the market.　((1)-(2): Huddleston and Pullum 2002: 166))

● Quirk et al. (1985)

Quirk et al. (1985) は、(4) は話し手のいらだちを示唆すると述べている。

(4) Bill **is continually / always / forever working** late at the office. (Quirk et al. 1985: 199)

※【注意】
①吉良 (2018) は Jespersen (1931) を受けて、進行形のこの用法を「感情的色彩」('emotional coloring') と述べている。Declerck et al. (2006: 54) は "repetitive habit" あるいは "incurable habit" と言っている。
②話し手のいらだちを含意しない例もある (以下の (5)-(7) を参照されたい)。

(5) A child **is always learning**. (Quirk et al. 1985: 199)
(6) Dion has been tremendous towards me. On the pitch he is like a big brother. He **is always helping** me. He **is always lifting** me and **keeping me going** at 100 per cent. (Depraetere and Langford 2020: 196)
(7) I **am always thinking** of you. (安藤 2005: 118)

③進行形の持つこのような特徴は現在進行形だけでなく、過去進行形にも見られ ((8)-(9) を参照)、さらに完了進行形にも見られる ((10)-(11) を参照)。実際、Palmer (1974, 1988) は、(8)-(11) は話し手の不承認 (speaker's disapproval) を示していると述べている。

(8) I **was continually falling** ill. (Palmer 1974: 70; Palmer 1988: 64)
(9) They **were for ever leaving** the gate open. (Palmer 1974: 70; Palmer 1988: 64)
(10) She**'s been dropping** things recently. (Palmer 1974: 70; Palmer 1988: 64)
(11) He**'d been continually stealing** from his friends. (Palmer 1974: 70; Palmer 1988: 64)

④安藤 (2005), Leech et al. (2009), Kranich (2010) は、(1)-(4) と (8)-(11) のような例は誇張表現・誇張法であると言っている。

3. 主観化

● Traugott and Dasher (2002: 225) と Traugott (2003, 2010) は、表現の意味変化は次のように構造化され得ると主張している。

(12) non-/less subjective > subjective > intersubjective

● 主観化 (subjectification) とは言語表現の意味変化についての通時現象で、Traugott (1995) では主観化は次の (13) のように規定されている。

(13) "a pragmatic-semantic process whereby meanings became increasingly based in the speaker's subjective belief state/attitude toward the proposition" (Traugott 1995: 31)

つまり、主観化とは、言語表現の意味が命題に対する話し手の信念や態度に根ざすようになる意味論的・語用論的プロセスである、と言える（cf. Traugott and König (1991)）。

● Traugott (2010: 35) では、主観化は（14）というメカニズムであると規定されている。

（14） "[M]eanings are recruited by the speaker to encode and regulate attitudes and beliefs." と

Traugott (2014a: 9) では、主観化は（15）と規定されている。

（15） "[S]ubjectification is a process of change giving rise to expressions of the Speaker's beliefs, and stance toward what is said."

◆ 主観化の例

主観化の例として、助動詞類 be going to の発達と、'during'（初期 ME）の意味から 'although'（初期近代英語）の意味への while の意味変化が挙げられる（Traugott (1989, 1995, 2010), Hopper and Traugott (2003)）。

(16) a. Mary **is going to** visit her agent. (動詞 go の進行形；目的を示す to 不定詞)
b. Mary **is going to / gonna** visit her agent. (助動詞類 be going to)
(17) a. Mary read **while** Bill sang. (時を表す接続詞)
b. Mary like oysters **while** Bill hated them. (譲歩を表す接続詞)

((16)-(17): Traugott 1995: 31; cf. Bybee 2015: 204)

(16) と (17) において、歴史的には、(b) は (a) の後に発達した。このような意味変化を先行研究は主観化と呼んでいる（cf. 森 (2021)）。

◇ Traugott (2010) は、主観化のさらなる例として、エピステミック法助動詞の will を挙げている（法助動詞 will は元々、欲求（desire）と意志（volition）を表す本動詞であった）。

4. always を伴う進行形の主観化

4.1. 進行形の発達の概要

● OE では、現在分詞形態素-ende は屈折変化をし、修飾する名詞の性・数・格と一致しなければならなかった (Brinton and Traugott (2005: 113)):

（18） Æ[th]elwulf ferde to Rome and [th]ær wæs xii mona[th] *wuniende*. （*OED*², Be 15a）

● 後期 OE では、-ende は-inde へと弱まり、これは初期 ME において規則的南部形式となった。12 世紀の終わりごろから-inde を-inge と音声的にまたは筆記的に混同する傾向が強くなった（*OED*², ing 2

を参照)。

(19) *Syngynge* he was, or *floytynge*, al the day
'He was singing, or fluting all day' (Chaucer, *General Prologue* 91)

● ME において、-ing は、別の名詞派生形-ung/-ing の部分的影響を受けて、-ende に取って代わった。Brinton and Traugott (2005: 115) の言葉を引用すると、約 1000 年の期間をかけて be＋-ing は進行相標識を示すようになった ("over a period of about a thousand years, a new discontinuous aspect marker *be -ing* came into being to mark a new category (progressive aspect).")

● 以上見てきたように、-inge が-ende にとって代わり、be＋-ing という形式の進行形へと発達した (このことに関する研究研究は Brinton and Traugott (2005) の他に、Visser (1963-1973), Denison (1993), Bybee et al. (1994) 等がある)。

4.2. always と共起した進行形と主観化

● 本研究は、always, continually, constantly, forever, perpetually などの副詞と使用されて話し手の非難やいらだちを示す進行形の用法は、主観化現象の一種であると主張する (cf. Smitterberg (2005: 210-214), Kranich (2010: 61-66; 2013: 8), Leech et al. (2009: 131))。

4.3. 言語的データ

● 現代英語において、be＋-ing という形式は、現在進行中の動作・行為を表す用法 (進行相標識用法) と always などの副詞と共に用いられて話し手の非難・いらだちを含意する用法がある (本研究の考察対象外ではあるが、現在進行形には確定的未来を示す用法もある)。この事実と、前節で見た、be＋-ing は元々進行相を示す用法であったという歴史的事実から、本研究で問題とする用法の進行形は、進行相を示す用法の後に発達したとわかる。

◎【上記を裏付ける言語的データ】
Brinton and Traugott (2005: 114) によると、be＋-ing の進行形は ME において発達していたと言える。実際、always 等の副詞を伴った進行形は以下の例 (20)-(23) の出典元に見られるように、初期近代英語以降である。

(20) Thou **art alwayes talking** of Love. (Lyly, *Euphues*, 1580)
(21) Thou **art alwayes figuring** diseases in me. (Shakespeare, *Measure of Measure*, 1603)
(22) They **are continually buffeting** one another with the Scripture.
(R, Barclay, *Apol. Quakers*, 1678)
(23) She **is always seeing** Apparitions, and hearing Death-Watches.
(Addison, *Spectator* no. 7, 1711)
((20) - (22): Wright 1994: 479; (23): Wright 1994: 479; Rissanen 1999: 221; cf. *OED*², always 1)

4.4. さらなる裏付け

● Huddleston and Pullum (2002: 166) は、(24) と (25) の例について "disapproval" という「感情的付帯的響き」('emotive overtone') を示すと言っている。また Quirk et al. (1985: 199) は、(26) の例において話し手は、ビルが遅刻して仕事をすることについて "an irritating or deplorable habit" を示唆しているようだと言っている (下線は筆者)。

(24) He's **always losing** his temper. (= (2))
(25) They're **always meeting** at the market. (= (3))
(26) Bill **is continually / always / forever working** late at the office. (= (4))

● 本節では、(24)-(26) の例が主観化されていることを確認したい。下線部の表現 (disapproval と an irritating habit) は英英辞典では次のように示されている。

(27) disapproval: an attitude that shows **you think that someone or their behaviour, ideas etc are bad or not suitable** (*LDCE*[6], s.v. *disapproval*)
(28) **an irritating habit**, situation etc **keeps annoying you** (*LDCE*[6], s.v. *irritating*)

(27) と (28) の太字体の部分は、話し手の belief や attitude を示すものであると言える。ゆえに、disapproval と an irritating habit という表現は話し手の belief や attitude を示している ((13)-(15) を参照されたい)。

● このように、(24)-(26) は主観化されているということを確認した。

5. Constructionalization

● Constructionalization is the creation of form$_{new}$-meaning$_{new}$ (combinations of) signs. It forms new type nodes, which have new syntax or morphology and new coded meaning, in the linguistic network of a population of speakers. It is accompanied by changes in degree of schematicity, productivity, and compositionality. (Traugott and Trousdale 2013: 22)

● constructionalization の例： 数量詞 a lot of ← OE における hlot (「物体」、しばしば「木の片」を表していた) からの発達 (Traugott and Trousdale 2013: 23-26)

● (1)-(4) の例は、Leech (1987: 33; 2004: 34) が言うように、通常の進行形が持つ「一時性」という要素 ('temporary' element) が欠落している。Quirk et al. (1985: 199) も、(1)–(4) のような例における進行形は「一時性」('temporariness') という意味的構成要素を失っていると述べている。

● be always -ing という形式は、一時性という意味機能を失った構文へと constructionalization され

ていると言える（Traugott and Trousdale (2013) を参照)。実際、状態動詞は通例では進行形で使用されないが（一時的状態を表す場合では状態動詞でも進行形にできる)、次の例に見られるように、この構文では状態動詞でも使用できる。

(29)　She's **always imagining** everybody is looking at her.　(Declerck 1991: 174)

● 類似例：　助動詞類 be going to の発達（(16a, b) を参照)

(cf. Traugott and Trousdale 2013; Traugott 2014b)

6. まとめ

● 進行形は、always, continually, constantly, forever, perpetually などの副詞と共に使用されると、話し手の非難・不快やいらだちを含意することがあり、本研究は、そのような進行形は主観化現象の一種であると主張し、その論証を行った。

● そのような進行形は、主観化を起こし、一時性という意味機能を失った構文へと constructionalization を受けている、あるいは、受けつつある。

参考文献

安藤貞雄（2005)『現代英文法講義』東京：開拓社.

Brinton, Laurel J. and Elizabeth Closs Traugott (2005) *Lexcalization and Language Change*. Cambridge: CUP.

Bybee, Joan (2015) *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Declerck, Renaat (in cooperation with Susan Reed and Bert Cappelle) (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase Volume 1: The Grammar of the English Tense System*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Denison, David (1993) *English Historical Syntax: Verbal Constructions*. London: Longman.

Depraetre, Ilse and Chad Langford (2020) *Advanced English Grammar* (2nd edition). London: Bloomsbury Academic.

Huddleston, Rodoney and Geoffrey K. Pullum (2002) *Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: CUP.

Jespersen, Otto (1931) *A Modern English Grammar*, Vol. IV. London: Allen & Unwin.

吉良文孝（2018)『ことばを彩る１　テンス・アスペクト』東京：研究社.

Kranich, Svenja (2010) *The Progressive in Modern English: A Corpus-Based Study of Grammaticalization and Related Change*. Amsterdam: Rodopi.

Kranich, Svenja (2013) "Functional layering and the English progressive." *Linguistics* 51(1), 1-32.

Leech, Geoffrey N. (1987) *Meaning and the English Verb* (2nd edition). London: Longman.

Leech, Geoffrey N. (2004) *Meaning and the English Verb* (3rd edition). London: Longman.

Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair and Nicholas Smith (2009) *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: CUP.

前田満（2015）「構文化の射程と文法化」『英語語法文法研究』第 22 号, 37-52.

森創摩（2021）「現在進行形の未来用法についての認知言語学的考察」『日本英語英文学』第 31 号, pp. 169-194. 日本英語英文学会.

Palmer, Frank R. (1974) *The English Verb*. London: Longman.

Palmer, Frank R. (1988) *The English Verb* (2nd edition). London: Longman.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Rissanen, Matti (1999) Syntax. In Roger Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language*. Vol.3. Cambridge: CUP.

Smitterberg, Erik (2005) *The Progressive in 19-Century English: A Process of Integration*. Amsterdam: Rodopi.

Traugott, Elizabeth C. (1989) "On the rise of epistemic meaning in English: An example of subjectification in semantic change." *Language* 65, 31-55.

Traugott, Elizabeth C. (1995) "Subjectification in grammaticalization." In Deiter Stein and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectification. Linguistic Perspectives*, 31-54. Cambridge: CUP.

Traugott, Elizabeth C. (2003) "From subjectification to intersubjectification." In Ramond Hicky (ed.), *Moves for Language Change*, 124-139. Cambridge: CUP.

Traugott, Elizabeth C. (2007) "(Inter)subjectification and unidirectionality." *Journal of Historical Pragmatics* 8, 295-309.

Traugott, Elizabeth C. (2010) "(Inter)subjectivity and (inter)subjectification: a reassessment." In Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, and Hubert Cuyckens (eds.), *Subjectification, Intersubjectification, and Grammaticalization*, 29-71. Berlin: Mouton De Gruyter.

Traugott, Elizabeth C. (2014a) "Intersubjectification and clause periphery." In L. Brems, L Ghesquière, and F. Van de Velde (eds.), *Intersubjectivity and Intersubjectification in Grammar and Discourse*, 7-27. Amsterdam: John Benjamins.

Traugott, Elizabeth C. (2014b) "Toward a constructional framework for research on language change." *Cognitive Linguistic Studies* 1(1), 3-21.

Traugott, Elizabeth C. and Ekkehard König (1991) "The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited." In Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization*. Vol.1, 189-218, Amsterdam: John Benjamins.

Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: CUP.

Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford: OUP.

Visser, Fredericus T. (1963-73) *A Historical Syntax of the English Language*. Leiden: E. J. Brill.

Wright, Susan (1994) "The mystery of the modal progressive." In Dieter Kastovsky (ed.). *Studies in Early Modern English*, 467-485. Berlin: Mouton de Gruyter.

Žegarac, Vladmir (1993) "Some observations on the pragmatics of the progressive." *Lingua* 90, 201-220.